

大学は学術研究のための共同体であるが、今日のようにその数がおびたしくなるにつれて、学術研究を第一の目的としながら、むしろ職業としての学問の府になりつつある。職業としての学問という場合には二つの面がある。より高い知識を必要とする社会にこたえるためのものが一つ、今一つは大学を出ることによってより有利に就職できるということである。そして表面はともかくとして、内実にはより有利な就職が多くの人々の願いになっていることは、就職に有利な学校に入学志願者の集中することを見てもわかる。そしてそのことによって大学自体の体質も変貌し、大学そのものも企業化するにいたったものが少なくない。

私はもともと大学という社会にはきわめて縁がうすかった。私自身大学を出ていないし、この大学に就職してから日も浅い。したがって大学を内側から見る機会は少なく、長い間外から見て来たのである。そういう者の見方からすると、今日までの大学は特殊社会であり、大学生は特権階級であると思っている。大学および大学生から言えばいろいろの不満と要求があるにしても、一般社会からすると特権階級である。

中学および高校を卒業したものの多くは、経済的事情のために大学へゆきたくても行けなくて就職する。その給料はやっと自分の生活を支えるにすぎない。そして毎日 8 時間を働き、時に時間外勤務も多い。勉強しようとすれば業務以外の時間をさかなければならない。

そして「大学におれば学ぶということによっていろいろの保護がなされ、しかも官公立大学の場合は国民の莫大な税金によって保護と指導がなされている」という事実が、働いている若者たちをどれほどうらやましがらせていることか。

その大学および大学生生活は次第に特権階級としての地位をくずしつつも、なお一方ではそれを守ろうとしているが、その内包する矛盾のために過去および現在の状況の維持は困難になって来つつある。そして今日、大学本来の使命感というものは非常に希薄になりつつある。むしろ大学を民衆社会のレベルにまで押し出してみることはできないものだろうかと思うことがある。

今日大学および大学生の直面しているもろもろの問題とそこに露呈している矛盾の克服は容易ではない。学問それ自体はもともと政治運動ではないとされて来たとし、その外に置かれることに保護されたともいえるのであるが、今日の社会のもっとも大きな特色は民衆のすべてが政治に対する発言をゆるされ、自由になって来たことである。戦前まではそういうことはなかったし、とくに政府に反対の立場をとって批判するとき、かならず大きな圧迫が加えられたものである。

しかし、そのことがなくなり、政治に対する発言が自由になってくるとき、当然古い権威によって維持されて来た特権の崩壊が見られてくる。特権の崩壊はまた古い秩序をつきくずしてゆく必然性をもっているが、それはスムーズに古いものから新しいものへと移行するものではなくて多くの混乱をよびおこす。

権威主義から抜け出すためには、まず特権意識からぬけだす努力がなければならぬが、現実にはむしろ特権を守ろうとする。それを既成の事実として。

10 月 19 日から 21 日にかけての芸術祭の自主運営をかりとるためにおこなわれた学生のストライキについても権威主義的なものへの抵抗とうけとっていいかと思うが、それが真の成果をあげるためにはなお多くの努力が必要になる。権威あるいは権力に身をおくもの

の共通に見られる現象は責任の所在の不明なことである。今日の官僚システムなどその例の一つであろうが、われわれはまずそういうものからぬけ出て一人一人が持つ主張を通すためには十分責任を果たすべきであろうと思う。主張に対する責任の裏打ちのあるとき、いわゆる特権はきえるものであると思う。

私のように机の前に向かってほとんど読書するという経験を持たず、歩きつつあるいは電車の中で、わずかの余暇を利用しつつ読書してきたものの眼からすると、2年乃至4年を思いのままに学ぶことができる機会を持った学生諸君は他の同年輩の者よりはるかにめぐまれた状況のもとにあるのだからその機会をフルに利用して自己発展のために努力してもらいたいものだと思う。芸術祭のごときも劃期的な成果をあげてもらいたいものだと思う。そのときはじめてストライキの意義があったことになる。

私は本来権威主義的なことはきらいだし、また特権にあぐらをかくような地位にいたこともない。年をとって教師になったのも、自分で得た知識をただ自分個人の者として一生を終わったとしたらなら、社会的に何をしてきたかさえわからなくなる。私の知識を必要とする者があるなら、その人たちのために残しておくべきものではないかと思つてのことである。

学生諸君が私を必要としなくなれば私はいつ去ってもよいと思つている。しかしそれは単に私一人だけではなくて本学の先生たちの気概でもと思つている。

しかも教師はただ学生に向つて教えるだけではなく、ともに伸びたいことを念願している。人は人に接することによって啓発せられる。教師もまた学生によって啓発せられるところがきわめて多いのだが、学生もまた教師を啓発するだけの抱負と努力をもってもらいたいものだと思う。

単に教師と学生の問題だけでなく、学生同士の間にも啓発しあうものがなければならぬ。それについてはすでによき芽がのびつつあるように思える。21日午後の話しあひのとき、学生諸君の間には武蔵野美術大学という共同体を意識したつよい連帯感が見られた。私はそれをすばらしいものと思った。油絵の、彫刻の、グラフィックデザインの、インダストリアルデザインの、建築の学生としての自覚のほかに、一人一人が美大の学生であるとの意識をつよく持ってきた。いわゆる無関心派などと言われるものは少数に過ぎない事実を知つて、この中から何かが生まれてくるだろうということが予測せられたのである。

今後の大学は大学という城の中にあるのではなく、民衆の中にあらねばならぬと思う。民衆の中にあつてそこに埋没するのではなく、民衆の先頭に立つ気概と努力が必要である。われわれはたえず新しいものを想像してゆかねばならぬ。それは同時にその社会のもともているものであらねばならぬと思う。

あたらしい時代への指向は学生のそのことにかたむける情熱と、教師の指導とが一体となつてなされるものである。このような一見平凡なことの確認と、その実現のための具体的な方法がたてられるとき、私は堅実なあゆみがそこにおこされるものであると思う。

大切なことはそのようにしておこされた歩みの――ここでは美術の世界における――ための情熱を共同体としてどのように持ちつづけるかということであろうと思う。ともするとすぐにマンネリ化しやすいものである。

私たちはいま芸術祭実行を通して学生諸君の異常なまでの情熱のたぎりを見る。しかもそれが空転しないで持続しつづけて、よりあたらしい世界をひらいてゆくためのエネルギーにしたいものと思う。